

神 殿 を 清 め る

聖 書 マタイによる福音書 21 章 12～17 節 讃美歌 351 512

説 教 森田幸男牧師

ただ今お読みしましたところは昔から「宮清め」と呼ばれている箇所であります。今日の箇所に記されております「宮清め」という出来事は、その前から読むと分かりますように、これは過越祭の最中のことであります。この21章の始めのところでイエス様はエルサレムに入城されたわけであります。ですからこれはイエス様の生涯の最後の一週間の最初の日、つまり日曜日の出来事であったということになります。

過越祭というのは繰り返し申しますように、イスラエルにとっては最も大事な祭りであります。「祭り」というのは「礼拝」と言い換えても良いと思いますが、これはイスラエルの民が神によって救い出されたあの「出エジプト」を記念する祭であります。神が自分たちに何をなしてくださったか、その御業とその御言葉によってご自身をどのような方としてお示しになられたか、その事を思い起こしつつ神様を礼拝し、神様の御心にあずかっていく。それが祭りを祝うことの意味であります。そして今申しましたように、「祭りを祝う」ということは「礼拝する」ということと等しいわけありますから、これは私たちが今なしております礼拝も、これは祝祭なのであります。

「宮清め」というのはどういうことでしょうか。12節を読みますと、「それから、イエスは神殿の境内に入り、そこで売り買いをしていた人々を皆追い出し、両替人の台や鳩を売る者の腰掛けを倒された」と記されております。イエス様にしては珍しく、乱暴と思える振る舞いをされたのであります。ここに「両替人の台や鳩を売る者の腰掛けを倒された」とあります。この「両替」ということですが、エルサレムの神殿に献げる献金はユダヤのお金「シェケル銀貨」をもって捧げないといけないので、ここは過越祭で、世界中に散らばっていたイスラエルの民がそれぞれの住んでいる所のお金を持って巡礼の旅をしてエルサレムにやって来たわけですから、それを神殿に献げるためのイスラエルのお金に両替するわけです。それが神殿の境内でなされていたのです。当時の一日の賃金は「1デナリ」と言われております。時代により、国により、価格は変わりますが、今の日本の相場なら五千円から1万円位でしょうか。それ位のものを献げるわけです。両替する時にはどこでもそうですが、手数料がかかりますね。その手数料が献げる金額の大体四分の一ぐらいかかるそうで、仮に献金が一万円とすれば、二、三千円の手数料になったようです。これらの献金や手数料が、神殿の維持、祭司たちの生活の支え、その他様々なことに充てられたわけであります。

そしてまた、「鳩を売る」とあります。鳩も神様に犠牲として献げるものであります。神様に献げるものですから傷があってはならないのであります。神殿の外で買うよりも神殿の中で買えば値段が十五倍もしたと言われます。それは勿論神殿の外で買って持ってきてもいいのですが、献げる時にはチェックされるのです。神殿の境内で売られているもの

には多分傷の無いものという検印が付いていたのでしょう。その印がなければ全部はねられるので、結局高価なものを境内で買わされるのです。でも神様に感謝するためにはるばるやって来た人たちは、それを惜しいとは思わなかったのでありましょう。

私はこの時の収入は一体どれくらいになるか、ざっと当時のことを考えて概算してみました。今の日本のお金で言えば何億というものではないですね。何十億というくらいの売り上げがこの過越祭ではあったのです。というのは、この時、二百万からの人々が集まったと言われているのです。その一人につき、今言ったような十五倍も高く売り付け、三千円もの両替料を取るのですから、ちょっと計算しただけでも何百億くらいのお金になるのです。それが過越祭、神様を礼拝することと、一つのシステムになっていたわけです。

それでイエス様は売り買いをしている人々を皆追い出し、両替人の台や鳩を売る人の腰掛けを倒された。そして、『わたしの家は、祈りの家と呼ばれるべきである。』ところが、あなたたちは、それを強盗の巣にしている』と言われたのであります。これを聞きつけ、神殿の当局者、ユダヤの民の指導者である祭司長や律法学者たちがやって来るのですが、このイエスという男は神を冒瀆する者であり、神殿並びにイスラエルの社会の秩序の破壊者であると断じざるを得ないわけであります。しかも、このような社会秩序の破壊者を民衆が支持しているのです。皆、このイエス様を「ホサナ、ホサナ、ダビデの子にホサナ」と歓呼して迎えているのです。今日のところでは境内の子供たちも、「ダビデの子にホサナ」と言って、イエス様を救い主としてほめたたえています。こんな男をこれ以上放置することは当然できないわけであります。

このように神殿の当局者たち、イスラエルの支配者たち、そして精神的指導者の律法学者たちは、イエス様の目からすると、祭りや礼拝や信仰を商売の具にしている。それを金儲けと権力保持の具にしていると写るのです。実際、それよりももっとキリストの言葉は厳しいのであります。「わたしの家は、祈りの家と呼ばれるべきである。ところが、あなたたちはそれを強盗の巣にしている」と。

両替とかいろいろな商行為は、我々の生活上、これらは欠かせないものでありますから、それ自体不要ということは当然ないわけです。しかし、最も神聖であるべき神殿において、商取引よりももっと悪質な強盗行為がなされていると、イエス様の目には映ったのであります。これは刷新するしかない、くつがえすしかない。そういうことでイエス様はこのような態度、「宮清め」に出られたということであります。

しかしこのような中で14節を見ますと、「境内では目の見えない人や足の不自由な人たちがそばに寄って来たので、イエスはこれらの人々をいやされた」と書かれています。つまり、「宮清め」というその行為だけを見ますと、“そんな乱暴をされないでもいいのに”という思いがしないでもないでしょうが、「目の見えない人や足の不自由な人たちがそばに寄って来た」と書いてあるのです。使徒言行録の3章に、「美しい門」というのが出ており、これは神殿に入る門が七箇所あったのですが、その門の外で物乞いをしていた足のきかない四十歳あまりの人が、使徒ペトロによって癒されたことが書かれていますので、目の見えない人とか足の不自由な人たちは、神殿の境内の外で、恐らく物乞いをしていた人たちであろうと思われまふ。祭りですから、多くの物乞いが集まっていたと思われまふ。そ

の人たちがイエス様のそばに寄って来て、そしてイエス様はこれらの人々をいやされたと書いてあります。この14節に書かれているような癒しは、ばたばたというような形では決してできません。心に怒りとか憤怒を秘めた形で人を癒すということは、これはいつの場合でも出来ることではありません。ですから「宮清め」の外面だけを見ているとひどく乱暴のように見えますけれども、これらの人々は、イエス様の行為に、むしろ自分たちにまで及んで来る神の慈しみと言うべきものが神殿の外にまで及んでくるのを感じて、神殿の中に引き入れられ、いやされたのです。ですからこれまでは信仰厚い、奇麗な人たちからいささかの物を貰って生活していたわけですが、今この人たちは、ついぞ入ったことのない神殿の中に入って、イエス様を通してこの癒しを受けて、本当にこの人たちは腹の底からこの神殿において神様を賛美したのです。彼らにとって神殿は「祈りの家」と言われても、これまでは中に入るのできなかった所でしたが、今、中に入って本当の祈り、礼拝し、感謝し、神様はこのイエス様のようなお方なのだということを彼らは身をもって経験したと思うのです。彼らは、イエス様の「宮清め」によって、神の恵みの奥深くに導き入れられたのです。礼拝とか祭りとかは本来こうでなければならぬのです。

イエス様は、「わたしの家は祈りの家と呼ばれるべきである」とこのようにおっしゃっています。「祈り」とは神様を礼拝し、その恵みに感謝し、その御心を覚え、また神様の御心をうかがい、それを実行に移す。そういうことまで含めて「祈り」だと思います。そして今の14節のこういうのを見ますと、キリストはこのような形、行為で、祈りを実行しておられると、このように言うてよいのではないのでしょうか。今、申しましたこのイエス様の乱暴と見える行為ですが、今まで恵まれなかった目の見えない人や足の不自由な人たちにとっては、そこにこそあの出エジプトという御業をなさってくださった神様のご臨在を感じたのではないのでしょうか。

そしてまたそれだけでなく、15節にこうあります。「祭司長や、律法学者たちはイエスがなさった不思議な業(いやしの業)を見、境内で子供たちまで叫んで、『ダビデの子にホサナ』と言うのを聞いて腹を立て、イエスに言った。『子供たちが何と言っているか、聞こえるか。』イエスは言われた。『聞こえる。あなたたちこそ、<幼子や乳飲み子の口に、あなたは賛美を歌わせた>という言葉はまだ読んだことがないのか。』」これは詩篇の8篇にある言葉です。先ほどの13節の言葉も、これはイザヤ書とエレミヤ書からの引用の言葉であります。

このように力ある者たち、自らを正統と考えている人たちではなくて、目の見えない人や足の不自由な人、それゆえに虐げられている人々、また、「お前たちは邪魔だ」と言われている子供たちが、イエス様の中に神様の恵みを感じて感謝し、その御名をほめたたえている。これこそ神殿で行われるべき祈り、礼拝であります。ところがそういうふうに入人を導くべき祭司長たちや律法学者たちは、これを見て腹を立てたと書かれています。

そういう意味では、今日の箇所は短いのですが、引用句はイザヤ書であり、エレミヤ書です。そして場は過越祭です。先ほどの、「幼子の口に賛美を・・・」というのは詩篇です。ということは、今日の箇所では旧約聖書の全体が踏まえられているということになります。そういう点では私たちはここから沢山のことを聞き取らないといけなないと思います。一つ

は、この祭司長や律法学者たちに典型的に見られることですが、たとえ延々とそれが神様への礼拝であり賛美であり感謝であると守られて来た過越祭であっても、その祭り方、それがいかに熱心に周到になされたとしても、それはそれだけでは礼拝でも祈りでも賛美でもないということです。それは悪質な強盗行為かもしれない。そういう自己吟味を私たちは迫られるわけであります。そしてその行為でもって、こういう目の見えない人とか足の不自由な人とか、小さい者としての子供たちとか、そういう者を、むしろ真の礼拝とか祈りとか神賛美とかから締め出してしまっている。そういうふうにして、自分たちを正当化することによって、人々を本当の祝福から遠ざけている。今、イエス様のいわゆる「宮清め」によって境内の外にやられていた人々が中に入って来たのです。子供たちも。その人たちには献げるべきお金も犠牲も何も無いのですが、その身一つで、本当に神様を経験して、賛美している。それこそ救いの経験、礼拝、賛美、感謝です。そういうところへこの人たちが入って来ているのであります。

そういうことを思いますと、私たちも今日のこの聖書の御言葉を通して自らを顧みつつ、そして私たちはもっと恵みと慈しみの奥深くにあずかっていけないといけないうし、あずかる余地はいくらもあるのだとおもいます。今のままではならないということを示されるのであります。

最後に、先ほどの「強盗の巣」というのはエレミヤ書からの引用なのですが、そこをお読みして終わりたいと思います。エレミヤ書7章1節から11節までです(1188ページ)。
＜主からエレミヤに臨んだ言葉。

主の神殿の門に立ち、この言葉をもって呼びかけよ。そして言え。

「主を礼拝するために、神殿の門を入れて行くユダの人々よ、皆、主の言葉を聞け。

イスラエルの神、万軍の主はこう言われる。お前たちの道と行い正せ。そうすれば、わたしはお前たちをこの所に住ませる。主の神殿、主の神殿、主の神殿という、むなしい言葉に依り頼んではならない。この所で、お前たちの道と行いを正し、お互いの間に正義を行い、寄留の外国人、孤児、寡婦を虐げず、無実の人の血を流さず、異教の神々に従うことなく、自ら災いを招いてはならない。そうすれば、わたしはお前たちを先祖に与えたこの地、この所に、とこしえからとこしえまで住ませる。しかし見よ。お前たちはこのむなしい言葉に依り頼んでいるが、それは救う力を持たない。盗み、殺し、姦淫し、偽って誓い、バアルに香をたき、知ることの無かった異教の神々に従いながら、わたしの名によって呼ばれるこの神殿に来てわたしの前に立ち、『救われた』と言うのか。お前たちはあらゆる忌むべきことをしているではないか。わたしの名によって呼ばれる神殿は、お前たちの目に強盗の巣窟と見えるのか。そのとおり、私にもそう見える、と主は言われる。＞

お祈りいたします。

憐れみ深い主イエス・キリストの父なる神様。

どうか、私たちが御言葉に照らされ、導かれて、真のあなたの御姿、あなたの御心を知り、またそのことによって自らを省みて、御心にそう歩みへとお導きください。

この祈り、イエス様の御名をとおし御前におささげいたします。アーメン